

| 授与する学位・学士(医療福祉学) | | ディプロマ・ポリシー | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|--|--|-------|---|----------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|------|------|------|
| 知識・理解 | 幅広い視野 | DP1: 人、自然、環境、社会、地域、国際について幅広い教養を有している DP2: 言語聴覚障害分野において適切な知識や理解、そして技術を有している DP3: 幅広い視野をもって合理的・批判的に判断できる | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 汎用的能力 | 基本的能力 | DP4: 適切な日本語運用力を修得し、活用することができる DP5: 母語以外の特定の外国語について基礎的なスキルを修得し、活用することができる DP6: 基礎的ICTの知識・スキルを修得し、適切に活用することができる DP7: 数的データを含む多様な情報を適切に収集・分析し活用することができる | | | | | | | | | | | | | |
| 態度・志向性 | 豊かな人間性 | | | DP8: 仏教精神を理解し、自らの理解・判断・行動を見つめ直す姿勢を身につけている DP9: 多様性の尊重と共生の精神を有している DP10: 日本の伝統文化を深く理解し、その成果を自分の生活に生かすことができる | | | | | | | | | | | | | |
| | | 統合的な学習経験と創造的思考力 | 応用的能力 | DP11: 高い倫理観を持ち、思いやりの心を忘れずに他者と接することができる DP12: 言語聴覚障害分野の知識・理解・技能等に基づき、対話や議論を重視し、他者・他文化との相互理解に努めることができる DP13: 言語聴覚障害分野の知識・理解・技能等を活用して、社会に参画する態度を有している | | | | | | | | | | | | | |
| 統一的な学習経験と創造的思考力 | 応用的能力 | | | DP14: 自らの生涯を見通す視野を持ち生涯を通じて学び続け、キャリア形成をする力を備えている DP15: 現代社会の諸問題を解決するために、言語聴覚障害分野の専門的知識と技能を活用し、問題解決に実践的に取り組むことができる | | | | | | | | | | | | | |
| | | 教科目 | 科目の主題 | 科目の到達目標 | ディプロマポリシーの項目番号 | | | | | | | | | | | | |
| ○: DP達成のために設定された到達目標と関連性がある ※1つの達成目標に対して最大3個まで | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | DP1 | DP2 | DP3 | DP4 | DP5 | DP6 | DP7 | DP8 | DP9 | DP10 | DP11 | DP12 | DP13 | DP14 | DP15 |
| 包括的ヘルスケア論 | 包括的な視点で地域・在宅で生活している人々に対する保健・医療・福祉の政策の動向を学ぶ | 1. 我が国の少子高齢化に伴う問題を理解する 2. 障害児・者・高齢者の地域における生活を支援するための諸制度や自立支援、就労支援、地域包括ケアシステムについての知識を修得する 3. 多職種連携による支援の技術を学ぶ | ○ | ○ | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 生命倫理 | 人の生命の尊厳と基本的人権、尊厳死などについて学び、言語聴覚士としての基本的倫理原則・倫理理論を学ぶ | 1. 人としての命の尊厳と基本的権利を対人援助職の視点から理解できる 2. 対人援助職として倫理原則、生命・医療倫理を理解している 3. 日常生活の場の問題解決を倫理的判断にもとづいて考察できる | | | ○ | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ |
| ターミナルケア | ターミナル期の問題を理解し、現状を学んだうえで、いかにターミナル期の患者に向き合うかについて、学習する | 1. ターミナル期の患者が抱える問題を理解する 2. ホスピス運動や緩和ケアの現在について理解する 3. コミュニケーションスキルや死生観(基本的な心構え)などを学ぶ | | ○ | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
| 専門職の連携(基礎) | 医療福祉機関をはじめとした地域の生活者の支援に関わる職種を理解する | 1. 取得を目指している資格は、他職種と連携し地域における包括的なヘルスケアシステムを担い、人の命を救う専門職としての資格であることを理解する 2. 地域における包括的なヘルスケアシステムを担う他の専門職を理解する 3. 他職種の視点を通して、将来についてのより明確な自己像を描けるようになる | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ |
| 専門職の連携(応用) | 他職種との連携協働の実践を学習する専門職連携に関する発展的な科目であり、実践力のある専門職として就職するための総まとめ的な学習を行う | 1. 他職種間での専門的かつ高次元なコミュニケーションをはかれるようになる 2. 実例を取り上げることで、より具体的に実践的な援助方法を理解する 3. 専門職としての自己意識を高め、資格取得に向けての意欲向上を目指す | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ |
| 仏教と医療福祉 I | 建学の精神に基づき、社会福祉やリハビリテーションの領域を「医療福祉」ととらえ、仏教と医療福祉の関係を考える。医療福祉の側面からは、その価値観と仏教精神の調和的関係構築が問題になる。こういった仏教と医療福祉の協働について学ぶ。 | 1. 建学の精神に基づく対人援助の基本を理解する 2. 仏教と医療福祉の関係を理解する 3. 仏教と医療福祉の協働について理解する | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
| 仏教と医療福祉 II | 医療福祉の現場において対人援助を行う場合、仏教に基づく人権尊重の価値観は、援助の質に対して影響を及ぼすものである。より深い専門性を備えた対人援助職のあり方について、実際の事例を参考に学生同士の学び合いから理解を深めていく。 | 1. 仏教に基づく人権尊重の価値観を修得する 2. 高い専門性を備えた対人援助職のあり方を理解する 3. 実際の事例から学生の学び合いを通して専門職間の連携を理解する | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
| 医療福祉連携論 | 近年、医療から介護制度を含む福祉へのシームレスな連携が求められている。医療と福祉について理解を深め、それらの連携の実態と理想を学ぶ | 1. 医療の実態について理解する 2. 福祉の実態について理解する 3. 医療と福祉との連携の実態と理想を理解する | | | ○ | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ |
| 日常生活支援学 | ADLの概念、リハビリテーション医学における重要性を学び、日常生活活動の範囲・より幅広い日常生活関連動作・QOLなどの概念との関係も理解し、対象者の日常生活を支援する専門家としての視点を学ぶ。 | 1. ADL・APDL・IADL・QOLの概念や範囲を説明できる。 2. ICFについて説明できる。 3. 人の生活におけるADLとその他の活動との関係性重要性を説明できる。 | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | ○ |
| 地域災害リハビリテーション | 災害時の医療活動が行政の中で、どのように位置づけられ、その中のリハビリテーション支援活動のあり方を理解する。また、災害時のリハビリテーション支援活動における作業療法士の役割を学ぶ。 | 1. 災害時のリハビリテーション支援が行政の中でどのように位置づけられるのか理解できる 2. 災害フェーズに合わせたリハビリテーション支援のあり方を説明できる。 3. 地域における防災と災害対策について実践できる | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | ○ |
| 障害者福祉 | 社会福祉士及び精神保健福祉士として、障害者福祉サービスのこれまでの歴史、社会背景を通して、現状の障害者福祉の意義と課題について習得できるようにする | 1. わが国の障害者に関する歴史と施策に関して理解し、必要な行動がとれる 2. 障害者に対する福祉サービスの種類、目的、その効果について理解し、専門職を目指す者として活用できる 3. 障害者福祉サービスと他の福祉サービスと比較し、総合的に理解できる | | | ○ | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | ○ |
| 基礎ゼミ I | 言語聴覚士を目指した学習の導入として、自ら考え学ぶという態度、学業達成のための基礎的な能力を身につける | 1. 自校史や建学の精神である仏教精神を理解している 2. 言語聴覚療法を自立して学習するための基礎的な能力を修得する 3. 大学で学ぶことの意義を理解し、他学生・教員との人間関係を形成する | | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
| 基礎ゼミ II | 言語聴覚士を目指した学習の導入として、自ら考え学ぶことを、自らの言葉でまとめ発表する力を身につける | 1. 自校史や建学の精神である仏教精神を理解している 2. 言語聴覚療法を自主的に学び発展させることができる 3. 他者の意見を尊重し、自らの意見を述べることで、人間関係をさらに発展させる | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
| 言語運用と数的処理の基礎 | 言語聴覚士に必要な言語運用能力と数的処理の力を養う | 1. 日本語文法を理解し、それによって文章を読解・作成できる 2. 数的処理の基礎を理解し、各種検査の処理ができる 3. 言語訓練・実施に必要な言語運用と数的処理の力をつける | | | | | | ○ | ○ | | | | | | | | |
| 教育学 | 教育とは何かについて、学問・制度・実践の側面からその理解を深め、理解を深める。そのことを通じて、教育に対する各々の考えを持ち、教育的思考様式を身につけることで、言語聴覚士としての学びの基礎を培う。 | 1. 学びの意義と教育の必要性を論理的に理解する 2. 学習者の実態に即した教育目標・教育方法の設定について理解する 3. 学習を効果的に進めるための教育指導の理論と技術を理解する | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |

| 学科学目 | 科目の主題 | 科目の到達目標 | ディプロマポリシーの項目番号 | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------------------|--|---|---|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|------|------|------|---|---|
| | | | ○: DP達成のために設定された到達目標と関連性がある ※1つの達成目標に対して最大3個まで | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | DP1 | DP2 | DP3 | DP4 | DP5 | DP6 | DP7 | DP8 | DP9 | DP10 | DP11 | DP12 | DP13 | DP14 | DP15 | | |
| 言語聴覚障害診断学演習Ⅱ(成人) | 失語症・構音障害・高次脳機能障害・聴覚障害などの症状を正しく評価・鑑別診断することや、併せて、随伴する重複症状を科学的に見極めることを学ぶ | 1. 言語聴覚障害の症状を正しく評価・鑑別診断できる 2. 主症状に随伴する重複症状を見極め評価できる 3. 言語聴覚障害の全体像を理解・把握し、治療プランを立てる | | ○ | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | | |
| 失語症演習 | 失語症Ⅰ・Ⅱで学んだ知識をもとに、本邦の代表的な総合的失語症検査である標準失語症検査(SLTA)の施行方法を習得する。また、検査結果を質的・量的に整理して失語症の有無および言語機能の問題点を論理的に説明する過程を学ぶ。さらに、様々な失語症検査の演習を通して、聴覚への配慮やコミュニケーション能力も養う。その他の失語症の評価方法や訓練法についても学ぶ。 | 1. SLTAマニュアルに沿った正確な実施手続きを習得し、検査結果から患者の問題点を抽出する過程を学ぶ 2. 検査実施時の被験者への配慮や対応について学ぶ 3. その他、総合的失語症検査および掘り下げ検査や代表的な訓練法について学ぶ | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | | |
| 高次脳機能障害演習 | 高次脳機能障害Ⅰ・Ⅱをベースとして、各種検査法の実践を紹介し、学生自身がグループで検査を実際に行い、その検査法・採点法の習得を目指す。検査法の種類が多いため、すべてを授業時間内にこなすことは困難と考えられる。したがって、教員の許可を得て検査練習を貸し出すこととし、各自で練習して習得することを求める。3年次の臨床評価実習、4年次の臨床総合実習には必要となるので、それまでに各種検査を繰り返し練習することが必要である。また、臨床場での実際をイメージできるように、事例を提示できるような準備している。これに関しては守衛義務が発生するため、事例について授業時間以外で不用意に発言することを禁止する。 | 1. 高次脳機能障害検査の実践を学ぶ 2. 検査結果から、総合的評価が出来るようになる 3. 評価から、患者や家族への説明が出来るようになる | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | ○ | | |
| 言語発達障害学演習 | 言語発達障害の臨床に用いる各種の発達検査や知能検査の特性を理解し、検査を実施し、結果を算出する方法を理解する。 | 1. 各検査の特性を理解する。 2. 各検査が実施できる。 3. 検査の結果をまとめる方法を理解する。 | | | ○ | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | |
| 発声発語障害演習Ⅰ(小児) | 小児の構音障害の臨床の流れを演習で学ぶ | 1. 問診・構音検査・構音器官の検査で情報を収集することを理解する 2. 評価と指導方針の決定について理解する 3. 構音訓練の技法を理解する。各種文書の書き方を理解する。 | | | ○ | | ○ | | | | | | | | | | ○ | ○ | |
| 発声発語障害演習Ⅱ(成人) | 運動障害性構音障害及び音声障害について、情報収集→評価(検査)→鑑別診断→訓練プログラムの立案→訓練の実施という実際の臨床方法を学ぶ | 1. 実際の臨床方法を演習し、ポイントを理解する 2. 検査・評価・診断法を、臨床場を想定して理解する 3. ディスカッションを可能な限り行い、論理的に考え、説明できる力を育てる | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | ○ | |
| 摂食嚥下障害学演習 | 摂食・嚥下障害について言語聴覚士が行う具体的な検査・評価・診断法について学ぶ。また、症状に対応した訓練、食料や姿勢、食事の助方法、訓練実施上の危機管理等臨床技術を習得することを目的とする。 | 1. 実際の臨床方法を演習し、ポイントを理解する 2. 検査・評価・診断法を、臨床場を想定して理解する 3. 論理的に考え、実践できる力を育てる | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | ○ | |
| 聴覚障害学演習 | 各聴覚検査と補聴器特性の測定と評価方法を演習して学ぶ。実際に検査装置、測定装置を操作し、種々の聴覚検査の検査方法と評価、補聴器の専攻科特性の測定などについて演習を行う。 | 1. 演習を通して、各種聴覚検査技術や測定技術を身に付ける。 2. 聴覚や補聴器、補聴器の適合状態を評価する力を養い、実践力を高める 3. ディスカッションを可能な限り行い、論理的に考え、説明できる力を育てる | | | | | | | | | ○ | | | | | | ○ | | |
| 画像診断学演習 | 画像診断学とは、人体の構造をさまざまな機材を用いて映像化した臨床診断に役立つ医学の一分野である。および4年次の病院実習において、また言語聴覚士とつながる患者さんたちは、脳神経系の疾患を患っている場合がほとんどであるので、それらの患者さんの脳画像、とくに脳幹や脳脊髄を撮影し、視覚される症状を推測してバリエーションに活かすことが求められる。この授業では、医療で用いられる様々な画像、機器について概説したうえで、中枢神経の画像に重点を置いて疾患ごとの神経画像の適応、所見についてまとめている。 | 1. 主要な画像診断法の特徴を理解する。 2. 言語障害を引き起こす神経疾患の画像的特徴を理解する。 3. 認知機能障害を引き起こす神経疾患の画像的特徴を理解する。 | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 言語聴覚障害学総合演習(検査・機器) | 言語聴覚療法に必要な臨床心理・神経心理検査や聴覚検査機器等の検査・評価・訓練の機械・器具についても学習する | 1. 言語聴覚療法に必要な検査・機器について最新の知識を学ぶ 2. 代替コミュニケーション(AAC)や支援機器(AT)を用いることができる 3. 当事者のQOLを高める支援方法について学ぶ | | | ○ | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ |
| 言語聴覚障害演習Ⅰ | この演習では学内の教員の下、言語聴覚障害者(成人領域)の症状について、情報収集(検査)・評価の流れを学習し、他の言語障害との違いを理解する。演習形式で様々な検査法や訓練法を理解し、実施できることを目標とする。 | 1. 言語聴覚障害者(成人領域)の症状について学ぶ 2. 情報収集(検査)・評価の流れを学ぶ 3. 様々な検査法や訓練法を理解し、実施できる力を育てる | | | ○ | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ |
| 言語聴覚障害演習Ⅱ | 対象者、スタッフとの円滑なコミュニケーションをはかるための基本的な対応について学習し、理解する。臨床に対する意識、コミュニケーションの基本となる共感的態度、コミュニケーションスキル、豊かな人間性など医療従事者としての基本的な態度やスキルを習得することを目標とする。 | 1. 円滑なコミュニケーションをはかるための基本的な対応について学習する 2. 臨床に対する意識を学ぶ 3. 医療従事者としての基本的な態度やスキルを習得する | | | | ○ | | | | | | | | | | | ○ | | ○ |
| 言語聴覚障害演習Ⅲ | 3年次行った臨床評価実習を踏まえ、患者を適切に評価、統合的に解釈、問題を把握し、再評価を含めた、その問題に応じた言語聴覚療法プログラムを設定することを学ぶ。特に総合実習の中で、仮説設定・訓練方法の立案、訓練の実施・スキル、再評価、仮説検証・修正の流れを理解し、実践できるようにする。 | 1. 患者を適切に評価、統合的に解釈、問題を把握する力を育てる 2. 問題に応じた言語聴覚療法プログラムを設定することを学ぶ 3. 仮説設定、訓練方法の立案、訓練の実施・スキル、再評価、仮説検証・修正の流れを理解し、実践できるようにする。 | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | ○ | |
| 言語聴覚障害演習Ⅳ | 演習を通して、対象患者の実習の過程で言語聴覚士の社会的役割とチームワークの重要性、理論的・法的責任を理解し、言語聴覚療法実施上の総合的能力を高める。また、対象患者の心理的問題や家族が抱える悩みを理解し、共感する態度を学ぶ。そして、言語聴覚障害を抱えながらも生きていく対象患者を支援し、共感する態度を学ぶ。 | 1. 言語聴覚士の社会的役割とチームワークの重要性、理論的・法的責任を理解する 2. 言語聴覚療法実施上の総合的能力を高める 3. 心理的問題や家族が抱える悩みを理解し、共感する態度を学ぶ | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | ○ | | ○ |

| 学科目 | 科目の主題 | 科目の到達目標 | ディプロマポリシーの項目番号 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|--|--|---|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|------|------|------|---|---|---|---|---|---|
| | | | ○: DP達成のために設定された到達目標と関連性がある ※1つの達成目標に対して最大3個まで | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | DP1 | DP2 | DP3 | DP4 | DP5 | DP6 | DP7 | DP8 | DP9 | DP10 | DP11 | DP12 | DP13 | DP14 | DP15 | | | | | | |
| 言語聴覚療法管理学 | 職場管理、言語聴覚療法教育及び職業倫理を含む。 マネジメントの基本概念とプロセス、職場環境、職業倫理、生涯教育、法的責任、多職種連携、労務・指導におけるマネジメントについて習得する。 | 1. 言語聴覚士としての職業倫理、法的責任を理解する | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | |
| | | 2. 言語聴覚士として必要な生涯教育、多職種連携を理解する | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | | |
| | | 3. 言語聴覚士として働く職場の管理・教育・労務・指導について理解する | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | |
| 認知症特論 | 認知症は高齢化社会において重要な課題である。認知症の症候学、診断学、治療体系につき概説する | 1. 総論について、診断学の歴史と最近の知見を学ぶ | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 2. 認知症の症候学について学ぶ | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | |
| | | 3. 認知症の治療体系について学ぶ | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | |
| 摂食嚥下障害学特論 | 現場での臨床業務に役立つ内容について、各講師が、それぞれの専門とする領域における最近の知見を交えて講義する | 1. 脳卒中や神経難病による摂食嚥下障害や、栄養サポートチームでの役割について学ぶ | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | | | |
| | | 2. 耳鼻科疾患による摂食嚥下障害や、手術療法について学ぶ | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | | |
| | | 3. 口腔生理学に基づく摂食嚥下障害への対応や補綴について学ぶ | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | | |
| 卒業研究 | 臨床現場に出た後も、言語聴覚学を学び、研究し続ける姿勢を養うことを目的とし、その第一歩となる研究論文を完成させる | 1. 学生自身が興味を持った研究テーマを選択し、そのテーマに合った研究デザインの作成を行う | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | |
| | | 2. テーマに沿った資料収集、データ収集、分析法、表現法などを学ぶ | | ○ | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| | | 3. 出来るだけ発表とディスカッションの場を多く設け、議論しつつ、論理的に、かつ科学的に研究を進める方法を学ぶ | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | ○ | |
| 専門ゼミⅠ | 専門課程の幅広い内容について体系的に整理し、理解を深め、言語聴覚士という専門職として必要なスキルや知識を修得する | 1. 臨床評価実習において臨床現場で修得した評価方法について説明できるようにする | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | |
| | | 2. 指導教官や他の学生とのグループ討議の中で理解を深める | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | |
| | | 3. 具体的な訓練プログラムの立案や実際の支援につなげていくことを学ぶ | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | |
| 専門ゼミⅡ | 本学を卒業後に言語聴覚士として臨床現場で円滑に働けるスキルや知識を修得する | 1. 臨床総合実習において臨床現場で修得した評価方法及び訓練方法、支援方法を説明できるようにする | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | |
| | | 2. 指導教官や他の学生とのグループ討議や、個別指導の中でより理解を深める | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | |
| | | 3. これまでの学習の中で不足している部分について、学習を反復して行い、現場での実践に備える | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | |
| 臨床見学実習 | 臨床見学実習は、1年次に実施した1日見学実習で得た、言語聴覚士の現場での学びを、1週間を通して、より詳細に把握する | 1. 言語聴覚士の現場での臨床を詳細に把握する | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | |
| | | 2. 見学内容と机上での学びを結びつけることで、専門科目の理解を深める | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | |
| | | 3. より具体的な言語聴覚士像を掴む | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | |
| 臨床評価実習 | 臨床評価実習は、言語聴覚障害を持つ子ども・成人の症状を評価・診断できることを目標とする | 1. 症例の症状を正しく測定し、評価を行う | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | |
| | | 2. 評価から正確な鑑別診断を行う | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | |
| | | 3. 評価と診断に基づいて実施される言語聴覚療法を理解する | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | |
| 臨床総合実習 | それまで学んだ基本的知識と技術を応用し、臨床実習指導者の指導のもとに患者を介して言語聴覚療法評価・治療を体験する | 1. 患者を適切に評価、統合的に解釈、問題を把握する | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | |
| | | 2. 問題に応じた言語聴覚療法プログラムを設定・実践し、さらに、再評価を行うことによる治療効果を検討する | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| | | 3. 言語聴覚士の社会的役割とチームワークの重要性、理論的・法的責任を理解し、言語聴覚療法実施上の総合的能力を高める | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | ○ | |